

# 潜伏性眼球震盪ノ一知見

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室 (主任 松田教授)

副手 西部 鮮之助

*Sennosuke Nishibe*

(昭和17年12月7日受附)

(本文ノ要旨ハ昭和17年5月15日大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會  
第59回集會ニ於テ映畫供覽ニ併セテ演述シタモノデアル)

## 内 容 抄 録

余ハ偶々潜伏性眼球震盪ノ一例ニ遭遇シ眼震回数ヲ 必要ガナイコトヲ知ツタ。  
數量的ニ觀察中、眼震發來ニハ必ズシモ一眼ヲ被覆ス

## 目 次

- |        |        |
|--------|--------|
| 1. 緒 言 | 4. 考 按 |
| 2. 症 例 | 5. 結 論 |
| 3. 總 括 | 文 獻    |

## 1. 緒 言

潜伏性眼球震盪ハ耳鼻咽喉科領域ト關係ガ薄イノデ主トシテ眼科領域ニ於テ研究發表サレテキル様デアル。即チ Fromaget(1912)ニ依ツテ潜伏性眼球震盪ト命名サレタノデアルガ、最初ノ報告者ハ夫レヨリ以前 Faucon(1871)ニ發シテキル。其後 Coard(1913), Cunningham(1914), Dorf(1914), Berg(1917), Kestenbaum(1921), Hairi(1921), 我國デハ小口氏ガ始メテ報告セラレ其後草間, 原田, 今井ノ諸氏ニヨリ記載サレテキル。

余ハ我教室ヲ訪レタ慢性上顎洞炎患者ニ於テ偶然本眼震ヲ認メ日ヲ異ニスルコトニ依ツテ其ノ震盪回数ニ變化アルヤ否ヤヲ數量的ニ觀察中、其ノ發來條件ニ疑惑ヲ感ジタ。即チ從來多ク記載サレテキル様ニ一眼ヲ被覆セズトモ、眼震ノ發來シ得ルコトヲ知ツタ。是レ余ノ一知見ト題シタ所デ、其ノ方法ハ只一限ノ視線ヲ凝視點ニ到ル途中デ遮斷スレバ足リル。此ノ遮斷ニハ種々ナ場合ガアリ得ル譯デアリ、其ノ各々ノ場合ニ於テ本眼震回数ヲ量的ニ觀察シタナラバ

或ハ興味アル結果ヲ得ルコトモアルカト思ヒ、少シク實驗ヲ行ツタノデ本例ヲ紹介シテ、現在ニ至ルモ尙諸説ガアツテ不明ナ本症ノ原因攻究

ニ聊カナリトモ資スル所アランコトヲ願ヒ敢ヘテ執筆シタ次第デアル。

## 2. 症 例

患者 ○○子, 25歳, 女子, 絲織工, 未婚。

初診 昭和17年2月12日。

主訴 兩側鼻閉塞ト頭重。

家族歴 父母健在, 同胞3人, 長兄ハ腹膜炎デ死亡, 患者ハ末子デアル。

既往症 11歳ノ時ニ腎臟炎ヲ患フ。初潮15歳デ以後順調デアル。

現病歴並ビニ耳鼻咽喉科領域所見 省略。

現症 體格寧ろ小デアルガ榮養可良。脈搏緊張ハヤ、硬イ。心臟濁音界ハ左右ニヤ、擴大ス。心音ヤ、亢進ス。肺臟並ビニ腹部ニハ異狀ハナイガ膝蓋腱反射亢進ス。

尿中蛋白陽性, 血清梅毒反應強陽性。顔面ニハ著明ナ夏日斑ヲ認メル。

診断(耳鼻咽喉科領域) 兩側慢性上顎洞炎。

上記ノ様ニ診断ガ決定シタノデ2月25日入院, 即日右側而シテ3月6日左側ノ慢性上顎洞炎根治手術並ビニ篩骨蜂巢開放術ヲ施行シ順調ナ経過ヲ以テ治癒シタ。余ガ術後ノ経過觀察中緒言デ述べタ如ク偶然潜伏性眼球震盪ヲ認メタノハ2月27日病室廻診時ニシテ當時患者ハ術側ナル右側ノ頬部並ビニ上顎部ニ水囊ヲ使用シテキタガ偶々當時布ノ一端ガ右眼ヲ覆フテキタ爲メ左眼ニ異狀眼球運動ヲ惹起シテキルノヲ目撃シタノニ初マル。ソコデ次ニ右眼ヲ開キ左眼ヲ覆フタ處右眼ニ同様ナ異狀眼球運動ヲ生ジ, 兩眼視デハカカル異狀運動ノナイコトヲ確認シ潜伏性眼球震盪ヲ保有シテキルコトヲ知ツタ。

潜伏性眼球震盪ニ關スル觀察。

問診

患者ハ5歳ノ頃左上眼瞼ノ側方半部ニ膿瘍ト推定サレル腫脹ヲ生ジタガ自然崩壊シテ治癒シタ。併シ其ノ痕痕ノ爲メカ眼瞼翻轉シ睫毛ガ爲メニ生ジタ溝ニ入ル様ニナリ人工的ニ整復シテモ直ニ原形ニ復シ爲メニ醜貌ヲ呈スルニ至ツタ。ソコデ整形術ヲ思ヒ立チ3年前

ノ2月某外科醫ノ手術ヲ受ケタコトガアツタト云フ。目下左顴骨弓部ノ皮膚ト左上眼瞼側部ニ植皮術ノ迹ガ認メラレル。コノ手術後時々異狀眼球運動ガ生ズル様ニナツタト患者モ母親モ述べテ居ル。

眼科領域所見

イ) 斜視ヲ認メズ。

ロ) 視力 右 0.1(0.5×-5.0Dcyl-2.0DA×180°)  
左 0.2(0.5×-cyl 4.0 DA×180°)

ハ) 眼底 乳頭ヤ、蒼白, 色素上皮粗糙。

ニ) 中心視野兩眼共線ニ對シ比較中心暗點ヲ認ム(之レハ軸性視神經炎ニ因ル)。

一般的觀察

家族的ニハ同胞並ビニ兩親ニモ異狀眼球運動ハ見ラレナイ。コノ眼球運動ヲ惹起サセルニハ何等内耳刺激操作即チ廻轉, 溫熱, 壓迫又ハ電流等ヲ用フル必要ハナク且ツ意志ノ作用モ全ク關係ガナイ。コノ意味デ偶發性デアル。發來中ハ前庭迷路ノ刺激狀ヲ隨伴シナイ。唯餘リ長時間一點ヲ凝視サセルト前頭部壓迫感, 頭痛等ノ眼精疲勞現象ガ輕度ニ現ハレル。此ノ眼球運動ハ兩眼視ニ於テハ全ク發來スルコトナク, 一眼ヲ被覆スル時ニノミ他側ニ向フ運動ガ兩眼球ニ同時性ニ必發スル。即チ内耳性眼震程ニハ著明デナイガ而モ尙緩徐ト急速ノ兩態ハ明ラカニ目撃サレ全ク波動性デアルコトハ認メラレナカツタ。

次ニ一眼ヲ被覆スルコトナク該眼ノ視線ヲ凝視點ニ至ル途中ニ於テ之レヲ遮斷シテ此ノ眼球運動ガ發來スルヤ否ヤヲ檢シタ處, 被覆シタ場合ト同様ナ眼球運動ガ惹起サレルコトヲ認メタ。即チ遮斷サレタ視線側ト反對側ニ向フ水平性眼球運動ガ兩眼球ニ同時性ニ惹起サレル(僅カニ廻旋性デアル)。コノ場合ニモ被覆シタ時ト同様ニ凝視點ノ位置ニ影響サレルコトナク眼球運動ノ發來スルコトヲ認メタ。

眼震回數ノ數量的觀察

次ニ約1ヶ月間ニ亘ツテ觀察シタ所ヲ表示スル。

第 1 表

観 察 眼		右(左眼被覆)			左(右眼被覆)		
観 察 日	凝視 方向	右	正面	左	右	正面	左
	観 察 事 項						
第 1 回 (3月6日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	66 大 ←	114 小 ←	104 小 ←	114 微 →	78 小 →	60 大 →
第 2 回 (3月10日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	90 微 ←	96 微 ←	88 微 ←	87 微 →	90 微 →	54 大 →
第 3 回 (3月11日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	83 大 ←	80 微 ←	89 微 ←	82 微 →	75 小 →	39 小 →
第 4 回 (3月14日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	112 小 ←	93 微 ←	102 微 ←	87 小 →	77 小 ←	32 小 →
第 5 回 (3月23日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	109 大 ←	117 微 ←	107 中 ←	95 大 →	105 中 →	97 中 →
第 6 回 (3月26日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	120 中 ←	121 微 ←	117 中 ←	85 中 →	94 中 →	81 中 →

- 〔備考〕 (イ) 表中凝視方向トアルノハ患者ノ眼前約30仙米ノ距離デ眼ノ高サニ持來シタ指頭ノ一點ヲ凝視サセタ際ニ於ケル其ノ方向ヲ意味ス。  
 (ロ) 眼震ノ大キサヲ大, 中, 小及ビ微ノ四ツニ區分シタ。(但シ目測)  
 (ハ) 回数ハ30秒間ニ發來セル眼震回数ヲ以テス。  
 (ニ) ←印ハ右方ニ向フ水平性眼震型, →印ハ左方ニ向フ水平性眼震型ヲ表ハンタモノ。  
 (ホ) 以下ノ表モ同様準之。

第1表ヲ綜括的ニ見ルタメ其ノ算術的平均値ヲ示セバ第2表ノ通りデアル。

第 2 表

観 察 眼	右(左眼被覆)			左(右眼被覆)		
	右	正面	左	右	正面	左
回 數	96	103	101	91	86	60
型 及 方 向	←	←	←	→	→	→
大 キ サ	大中 4 微小 2	微小 6	中 2 微小 4	大中 2 微小 4	中 2 微小 4	大中 4 微小 2

第 3 表

観 察 眼	右	左
回 數	100	79
型 及 方 向	←	→
大 キ サ	大中 6 微小 12	大中 8 微小 10

次ニ右眼ト左眼トヲ比較スルタメ第2表カラ第3表  
ヲ導出シタ。

次ニ一眼ヲ被覆スルコトナク, 概ネ病床日誌大ノ黒

色長方形板(縦徑31仙米, 横徑25仙米)ヲ用ヒ, 其ノ  
長邊ヲ患者顔面上ノ正中線上ニ置キ之レヲ矢狀位ニ保  
チ, 然ル後之レヲ顔面接觸線ヲ廻轉軸トシテ45度傾斜

シテ隨時左眼又ハ右眼ノ視線ヲ凝視點ニ到ル途中ヲ遮 之レヲ第4表ニ示シタ。  
 斷スルコトニヨリ發來スル眼球運動ノ回數ヲ調査シテ

第 4 表

觀 察 眼		右(左視線遮斷)			左(右視線遮斷)		
觀 察 日	凝視 方向 觀察 事項	右	正面	左	右	正面	左
		第 1 回 (3月11日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	92 小 ←	50 小 ←	85 小 ←	68 大 →
第 2 回 (3月14日)	回 數 大 キ サ 型 及 方 向	85 大 ←	93 小 ←	115 小 ←	43 中 →	92 中 →	84 大 →

前記ノモノト同様ニ第5表及ビ第6表ヲ得タ。

第 5 表

觀 察 眼		右(左視線遮斷)			左(右視線遮斷)		
凝視 方向 觀察 事項	觀察 事項	右	正面	左	右	正面	左
		回 數 型 及 方 向 大 キ サ	88 ← 大 1 小 1	71 ← 小 2	100 ← 小 2	55 → 大 中 2	79 → 中 1 小 1

第 6 表

觀 察 眼		右	左	
凝視 方向 觀察 事項	觀察 事項	回 數	86	71
		型 及 方 向 大 キ サ	← 大 1 小 5	→ 大 中 5 小 1

更ニ本患者ニ1% 鹽酸ピロカルピン」0.5ccヲ皮下 ガコレデ更ニ第8表ヲ誘導シテ見易クスル。  
 ニ注射シテ眼震狀態ヲ檢シタモノヲ表示スル。第7表

第 7 表

觀 察 眼		右(左眼被覆)			左(右眼被覆)		
時間關係	凝視 方向 觀察 事項	右	正面	左	右	正面	左
		注射前	回 數 型 及 方 向 大 キ サ	83 ← 微	110 ← 微	105 ← 微	80 → 中
注射後 10 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ	125 ← 微中大	115 ← 微中大	122 ← 微中大	85 → 微中	104 → 微中	110 → 微中
注射後 30 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ	100 ← 微	113 ← 微	108 ← 微	85 → 微	105 → 微	93 → 微
注射後 60 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ	93 ← 微	98 ← 微	93 ← 微	83 → 微	100 → 微	90 → 微

第 8 表

時間關係	觀 察 眼		右	左
	觀察 事項		回 數	99
注射前	型 及 方 向 大 キ サ		← 微 3	→ 中 1 微 2
注射後 10 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ		120 ← 微中大 混合	99 → 微中 混合
注射後 30 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ		107 ← 微 3	94 → 微 3
注射後 60 分	回 數 型 及 方 向 大 キ サ		94 ← 微 3	91 → 微 3

又 0.1硫酸アトロピン 0.5cc ヲ皮下ニ注射シテ第9表, コレカラ見易クスルタメ第10表ヲ得タ。

第 9 表

観 察 眼		右(左眼被覆)			左(右眼被覆)		
時間関係	観察事項 凝視方向	右	正面	左	右	正面	左
		注射前	回数 型及方向 大キサ	102 ← 大	105 ← 小	100 ← 小	79 → 小
注射後 10分	回数 型及方向 大キサ	110 ← 大	113 ← 小	108 ← 小	81 → 小	92 → 小	110 → 大
注射後 30分	回数 型及方向 大キサ	106 ← 中	104 ← 小	102 ← 小	80 → 小	105 → 小	54 → 中
注射後 60分	回数 型及方向 大キサ	107 ← 中	105 ← 小	105 ← 小	92 → 小	95 → 小	100 → 中

第 10 表

時間関係	観察事項	観 察 眼	
		右	左
注射前	回数	102	83
	型及方向 大キサ	← 大1 小2	→ 大2 小1
注射後 10分	回数	110	94
	型及方向 大キサ	← 大1 小2	→ 大1 小2
注射後 30分	回数	104	79
	型及方向 大キサ	← 中1 小2	→ 中1 小2
注射後 60分	回数	105	95
	型及方向 大キサ	← 中1 小2	→ 中1 小2

### 3. 總 括

コ、デ余ガ經驗シタ本患者ノ所見ヲ通覽スルニ、本例ハ鼻閉塞ト頭痛ヲ訴ヘテ我臨床ヲ訪レタ未婚女子デ、幼時腎臟炎ニ罹ツタト告ゲテキル様ニ尿中ニ蛋白ガ證明セラレ此ノ陽性度ハ日ヲ異ニスルニ從ツテ増減ヲ示シタ。之レハ慢性腎臟炎カ萎縮腎ニ傾イテキル爲メダラウト思ハレル。此ノ既往症ニ因ルタメカ循環器ニ多少障碍ガ認めラレルガ自覺症狀モナク他覺的ニモ浮腫モ認めラレナイ程度ノモノデアル。別ニ興味アルノハ血清梅毒反應強陽性及ビ顔面ニ著明ナ夏日斑ヲ認めルコトデアル。本患者ハ慢性上顎洞炎ノタメ入院加療セラレタモノデアルガ此ノ事ニ就イテハ特ニ述ベル事ハナイ。

眼科領域所見トシテハ左上眼瞼ニ植皮痕ト推定サレルモノガ存在シ、斜視ハ認めラレナイガ、兩眼ニ弱視ノアルコトハ見逃セナイ所デアル。此ノ他ニ兩眼軸性視神經炎ガ合併シテキル。

上述ノ如キ患者ガ偶々兩眼ニ異狀眼球運動ヲ保有シテキタカラ之レヲ檢査シテ次述スルガ如キ成績ヲ得タノデアル。即チ兩眼デー點ヲ凝視スル際ニハ何等異狀眼球運動ハ起ラナイガ、一眼ヲ被覆スレバ被覆シナイ眼ノ方向ニ急速態ヲ有スル眼球運動ガ兩眼同時性ニ反覆シテ發現スル。性質ハ肉眼上水平性(僅カニ廻旋性)ヲ呈シ、眼球運動ノ振幅ハ常ニ一定トハ限ラナイ。即チ大ナル振幅ヲ以テ運動ヲ反覆スルウチ突然小ナル振幅ヲ以テスル運動ヲ見ルコトアリ又之レニ反スル場合モ介在シ、大中小微種々混合性デアルガ、余ガ觀察シタ單位時間(30")内ニ見ラレル大キサニ關シテハ大體肉眼上等シイ振幅ヲ以テスル運動ガ絶對多數デアツタ。此ノ眼球運動ヲ發來サセルニハ全く意志ヲ必要トシナイ。又此ノ運動發來中ハ何等前庭迷路刺戟時ニ見ラル、ガ如キ隨伴症狀ハ之レヲ缺クガ長時間凝視ヲ續ケルト輕度ニ眼精疲勞症狀ヲ伴フコト

ガアル。此ノ眼球運動ハ毎検査時同様デハナイ(第1表参照)ノデ平均シテ第2表トシク。今第2表ニ就イテ見ルト、左眼被覆時觀察眼ヲ右ニ採リ其ノ眼球運動回數ヲ見ルニ凝視方向ヲ右側ニ在ラシメタ場合ハ96ヲ示シ、凝視方向ヲ正面位或ハ左側ニ在ラシメタル場合ノ103或ハ101ニ比ベ小デアル。即チ眼球運動ノ方向ニ凝視方向ヲ採ツタ場合ニ眼球運動回數ハ最モ小デアル。

大キサヲ見ルニ凝視方向ヲ正面位ニ在ラシメタル場合ハ微ト小ダケデアルガ、凝視方向ヲ右側或ハ左側ニ在ラシメタル場合ニハ大アリ中アリテ正面位ニ近ヅクニ從ヒ振幅ハ小サクナル傾向ヲ有ス。

次ニ右眼被覆時觀察眼ヲ左ニ採リ其ノ眼球運動回數ヲ見ルニ凝視方向ヲ左側ニ在ラシメタ場合ハ60ヲ示シ、凝視方向ヲ正面位或ハ右側ニ在ラシメタ場合ニ於ケル86或ハ91ニ比ベ小デアル。即チ眼球運動ノ方向ニ凝視方向ヲ採ツタ場合ニ眼球運動回數ハ最モ小デアル。大キサヲ見ルニ凝視方向ヲ正面ニ在ラシメタル場合ハ中、小、微ハアルガ、凝視方向ヲ左側或ハ右側ニ在ラシメタル場合ニハ何レモ大ヲ含ミ正面位ニ於テハ一般ニ小デアル。

次ニ右左兩側ヲ比較スルニ(第3表参照)眼球運動回數ハ右100デ左79デアルカラ右ガ優ツテキル。大キサニ就イテハ左右兩側共ニ大、中、小及ビ微ヲ含ミ左右ニ著シイ差ガアルトハ思ハレナイ。

次ニ一眼ヲ被覆スルコトナク既述シタ方法ヲ以テ一側視線ヲ凝視點ニ到ル途中ニ於テ之レヲ遮斷シテモ同様ニ眼球運動ヲ發來セシメ得タガ(第4表参照)、之レヲ前記ノ一眼被覆法ノ場合ト同様ニ第5表ニ就イテ見ルト、左視線遮斷時觀察眼ヲ右ニ採リ其ノ眼球運動回數ヲ見ルニ凝視方向ヲ正面位ニ在ラシメル場合ハ71ヲ示シ、凝視方向ヲ右側或ハ左側ニ在ラシメタ場合ノ88或ハ100ニ比ベ小デアル。即チ眼球運動ノ方向ニ凝視方向ヲ在ラシメル時ニハ眼球運動回數ハ中間ノ値ヲ示ス。大キサハ凝視方向ヲ正面位並ビニ左側ニ在ラシメル時ハ小ノミデアルガ右側

ニ在ラシメル時ニハ大ヲ含ム。

次ニ右視線遮斷時觀察眼ヲ左ニ採リ其ノ眼球運動回數ヲ見ルト、凝視方向ヲ右側ニ在ラシメタ場合ハ55ヲ示シ、正面位或ハ左側ニ在ラシメタ場合ノ79或ハ81ヨリモ小デアル。即チ眼球運動ノ方向ニ凝視方向ヲ在ラシメタ際ニハ最モ大ニシテ眼球運動ノ方向ト反對側ニ凝視方向ヲ在ラシメタ際ニハ最モ小デアル。大キサハ凝視方向ヲ正面位ニ在ラシメタ場合ハ中及小デアルガ、右側或ハ左側ニ在ラシメタ場合ニハ大ヲ含ム。即チ凝視方向ヲ正面位ニ在ラシメル場合ニ於テ振幅ガ最大トナルコトハナイ。

第6表ニ就イテ左右ヲ比較スルニ、眼球運動回數ハ右86デ左71ヲ示シ右ガ優ツテキル。大キサハ右ニ小ガ多ク左ニ大及中ガ多イ。

更ニ1%鹽酸ピロカルピン $0.5cc$ ヲ皮下ニ注射シタ場合ヲ第7表ニ就イテ見ルニ眼球運動回數ニ動搖ガ多ク成績ハ明ラカデナイカラ、第8表ニ就イテ纏メタモノヲ見ルコトニスル。即チ注射後10分デハ觀察眼ヲ右ニ採レバ、眼球運動回數ハ注射前値99ナルニ120ヲ算シ其ノ増加ヲ認メ、大キサハ注射前デハ微ノミナルニ大、中及微ヲ含ミ其ノ振幅ノ動搖ヲ認メルコトガ出來ル。觀察眼ヲ左ニ採レバ眼球運動回數ハ注射前値90ナルニ99ヲ算シ其ノ増加ヲ認メ、大キサハ注射前デハ中及微アルモ注射後10分デハ單位時間(30")内ニ中及微ガ頻繁ニ混合シテ生ジ其ノ振幅ノ動搖ノ甚シキヲ思ハセタ。

注射後30分デハ觀察眼ヲ右ニ採レバ、眼球運動回數ハ107ヲ示シ、注射後10分時ノ成績ニ比シ減少セルヲ知ル。大キサハ微ノミトナツタ。即チ振幅ハ微ノミニ安定シテ來タト推定サレル。觀察眼ヲ左ニ採レバ眼球運動回數ハ94ヲ示シ、注射後10分時ノ成績ニ比シ減少セルヲ知ル。大キサモ微ノミトナリ振幅ガ微ノミニ安定シタト推定サレル。

注射後60分デハ觀察眼ヲ右ニ採レバ眼球運動回數ハ94、大キサハ微ノミトナツタカラ略注射前ニ復シタト見做スコトガ出來ヤウ。觀察眼ヲ左ニ採レバ眼球運動回數ハ91ニシテ大キサモ微

ノミデアルカラ是レモ亦注射前ニ復シタト見做スコトガ出来ヤウ。

更ニ0.1% 硫酸アトロピン<sub>1</sub>0.5ccヲ皮下ニ注射シタ處(第9表参照)「ピロカルピン」注射ノ場合ト同様ニ纏メタ成績表タル第10表ニ就イテ見ルニ、注射後60分間ニ3回檢シタガ眼球運動回數並ビニ大キサニ關シテ注射前ト大差ガ認めラレナカツタ。

コ、デ追記シ度イコトハ、余ガ使用シタ長方形板ノ一邊ヲ顔面正中線ニ一致セシメ、而モ之レヲ矢狀位ニ保持シ、此ノ板ヲ含ム平面上ノ一點ヲ凝視點トスル時ハ兩眼視ハ可能デアアルカラ異狀眼球運動ハ發來シナイ事デアアル。而シテ此ノ板ヲ傾斜スルニ眼球運動ガ惹起サレル事ト然ラザル事トガアル。即チ之レハ凝視點ノ存在位

置ト關係ガアルカラデアアル。即チ凝視點ノ存在位置ヲ一定ノモノトスレバ、板ノ邊緣或ハ平面ニテ孰レカー眼ノ視線ヲ遮斷スルニ足ル程度ノ傾斜度ガ必要デアアルコトヲ知ツタ。而シテ視線ヲ遮斷セル上ハ該板ガ遮斷側ノ眼前ニ接近スレバスル程此ノ眼球運動ガ著明ニ發來シ、隔離スレバスル程眼球運動回數ハ減少シ、兩眼視線ガ障碍ナク凝視點ニ到達シ得ルガ如ク目撃サレルニ至レバ、此ノ眼球運動ハ消失スル。此ノ眼球運動發來ハ凝視點ノ位置ニハ關係ガナク、何レノ一點ヲ凝視スル場合ニモ一側視線遮斷ガ必要デアリ且ツ之レガ充分ナ條件デアアルコトヲ知り、此ノ檢査法ヲ余ガ一知見ト題シタ所以デアリ、此ノ遮斷ニ就イテハ考按ニ於テ吟味スル。

#### 4. 考 按

抑々眼球ノ異狀運動ニシテ眼球震盪ト稱スベキモノニハ種々アル。即チ最終位眼震ヤ Uffenordeノ稱スル疲労性眼震ハ生理的トサレテキル。鐵道眼震、鍬夫眼震、盲人性眼震、弱視者ニアル視性眼震、末梢性前庭迷路器ノ異常ニ因ル眼震、更ニ頭蓋内ニ原因ヲ求ムベキ眼震及ビ單ニ官能性刺戟ニ原因ヲ求ムル眼震等ハ皆偶發性眼震トサレテキル。此ノ他ニ實驗性眼震及ビ Ohmノ所謂視性廻轉性眼震ガアル。更ニ詳細ニ入レバ家族性眼震ヤ Brücknerノ報告(1917)ニ依ル隨意性眼球運動等ガ擧ゲラレル。翻ツテ余ノ症例ヲ觀ルニ、以上ノモノトハ異ナリ潜伏性眼震トシテ差支ヘナイ様ニ思惟サレル。元來潜伏性眼震ト稱スルモノハ一眼ヲ被覆シタ場合ニ他眼ニ眼震ヲ生ズルコトハ勿論デアアルガ、兩眼視ノ場合デモ強ク側方ヲ見サセテ一眼ノ視野ガ鼻竇デ遮斷サレル場合ニモ生ズルト信ゼラレテキル。又強度ノ凹鏡ヤ三稜鏡モ他眼ニ眼震ヲ惹起シ或ハ強力ナル光線ヲ眼球ニ投射スル際ニモ生ズルト謂ハレテキル。コ、デ余ガ最近約10ケ年間ニ我國デ報告サレタ潜伏性眼震例ノ檢査法ヲ一瞥スルニ、田邊、林、淺田、横田、工藤

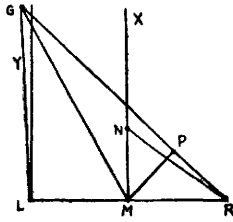
及ビ簡ノ諸氏ハ皆齊シク片眼ヲ蔽ヘバ他眼ニ眼震ガ生ズルトノミ簡單ニ記載シテアル。余ハ一眼ヲ被覆シタ場合ニハ勿論眼震ハ惹起サレルガ、必ズシモ眼震發來ニ此ノ被覆法ノミガ必要條件デハナイコトヲ述ベタイ(之レハ余ノ例ニ基ヅクモノデアアル)。即チ余ノ思付ハ既述シタ通り患者ノ顔面正中位ニ一平面ヲナス板ヲ密着セシメ之レヲ矢狀位ニ保持シ、此ノ板ヲ含ム平面上ノ一點ヲ凝視點トスル場合ニハ全く眼震ハ現ハレザルモ板ガ顔面正中位ニテ之レニ密接スル一邊ヲ軸トシテ之レヲ左方又ハ右方ニ廻轉サセ、之レガ一眼ノ視線ヲ遮斷スルニ至レバ他眼ノ方向ニ急速態ヲ有スル眼震ガ左右同時性ニ惹起サレ、板ガ眼前ニ接近スレバ益々眼震ハ著明トナル。反之眼前近クカラ板ヲ次第ニ遠ザクレバ眼震ハ漸ク衰へ、凝視點ガ此ノ板上ニ在ルガ如キ状態トナレバ眼震ハ消失スル。凝視點ハ顔面空間ノ任意ノ一點デアレバ差支ヘナク、遠近、上下、側方ヲ問ハズ何レニ存在スルモ眼震ハ發來スル。即チ此ノ眼震發來ノ條件ハ一眼視線ヲ遮斷スルコトガ必要デアリ且ツ此ノ遮斷ノミデ充分デアアル。以上ノ如ク本例ニ就イテ余ノ

觀察ニ誤謬ガナイトスレバ此ノ凝視點ガ任意ノ位置ニ存スル種々ナ場合ニ於テ遮斷板ガ視線ヲ遮斷スルニ必要ナ大キサニ就イテ、次ノ如ク圖ヲ以テ吟味スルコトガ許レヨウ。

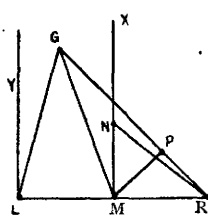
今右瞳孔ヲR、左瞳孔ヲL、此ノ兩側瞳孔ヲ結ブ直線RLノ中央ヲM、鼻梁上ノ1點ヲNト

スレバMNハ鼻ノ高サヲ示スコトニナリ、凝視點ヲG、直線LMRノ各點ニ於テ此ノ直線ニ垂直ナ直線ヲ夫々Y、X、Zトシ且ツ此等ノ諸點及諸線ハ皆同一平面上ニ在ルモノトシテ(但シN點ハ此ノ平面ニ在ラズ)次ノ圖ニ就イテ考ヘテ見度イ。

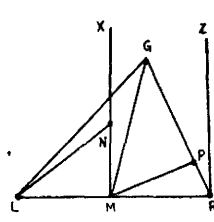
第 1 圖



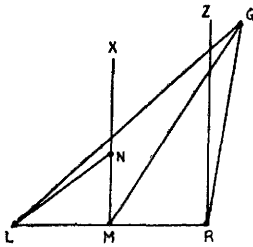
第 2 圖



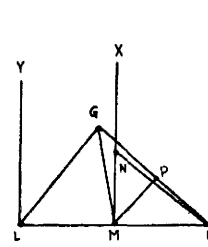
第 3 圖



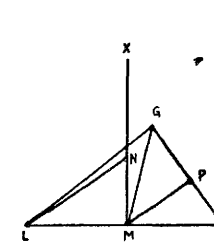
第 4 圖



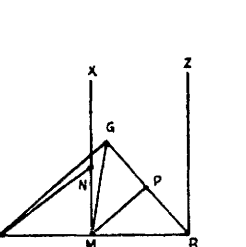
第 5 圖



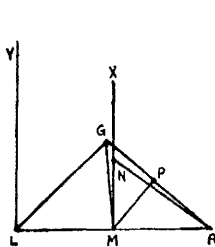
第 6 圖



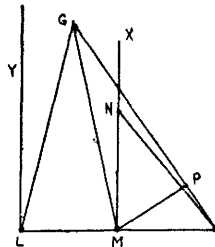
第 7 圖



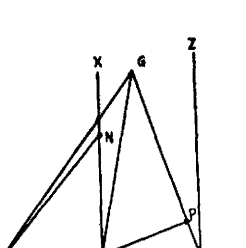
第 8 圖



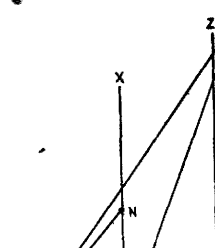
第 10 圖



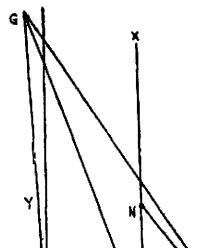
第 11 圖



第 12 圖



第 9 圖





玆ニ示シタ圖ハ皆右眼ノ視線ヲ遮斷スル場合ノミデアル。左眼ノ視線ヲ遮斷スル場合ハ之レト正反對ト見倣シテ差支ヘナイカラ省ク。

第1圖カラ第4圖マデハ  $MG > MR > MN$  ノ場合ヲ示ス。第1圖ハG點ガY線ノ左側、第2圖ハG點ガY線トX線トノ間ニ存在スル場合ヲ示スモノデ、此ノ兩者ハ何レモ  $\angle MRG > \angle MRN$  ナルコトヲ要ス。何トナレバ  $\angle MRG < \angle MRN$  ナラバMNハ自ラ右視線RGヲ遮斷スルカラデアル。故ニ此ノ場合遮斷板ヲ要シナイコトアリ。第3圖ハG點ガX線トZ線トノ間ニ存在スル場合ヲ示スモノデアル。此ノ場合  $\angle MLG > \angle MLN$  ナルコトヲ要ス。何トナレバ  $\angle MLG < \angle MLN$  ナラバ左視線LGヲMNニテ遮斷スルコトニナリ右視線ヲ遮斷スル目的ニ反スルカラデアル。以上ノ第1圖カラ第3圖マデニ於テMヨリRGニ垂直ナル直線MPヲ描キ得ルガ、遮斷板ハ此ノMPヨリモ大ナルヲ要ス。第4圖ハG點ガZ線ノ右側ニ在ル場合デ、 $\angle MLG > \angle MLN$  ナルコトヲ要ス。何トナレバ  $\angle MLG < \angle MLN$  ナラバ左視線LGハMNニテ遮斷サレ右視線ヲ遮斷スル目的ニ反スルカラデアル。此ノ場合ハMヨリRGニ垂直ナルMP線ハ眼前即チLR線ヨリモ前方ニ描キ得ナイカラ遮斷板ハMRヨリモ大ナルヲ要ス。

第5圖ト第6圖ハ  $MG = MR > MN$  ノ場合ヲ示ス。此ノ場合ニハG點ハY線或ハZ線ノ左側或ハ右側ニ在リ得ナイ。即チG點ハY線トX線トノ間又ハX線トZ線トノ間ニ在ル場合ヲ考ヘレバ良イ。G點ガY線トX線トノ間ニ在ル場合ハ  $\angle MRG > \angle MRN$ 、G點ガX線トZ線トノ間ニ在ル場合ハ  $\angle MLG > \angle MLN$  ナルコトヲ要ス(理由ハ前記ノ場合ト同様デアルカラ省ク)。遮斷板ハ何レモRG線ニ垂直ナルMP線ヨリモ大ナルヲ要ス。

第7圖ト第8圖ハ  $MN < MG < MR$  ノ場合ヲ示ス。此ノ場合モG點ガX線トZ線ノ間或ハY線トX線ノ間ニ在ル場合ヲ考ヘレバ良イ。第7圖ハ前者ノ場合ヲ示スモノデ  $\angle MLG > \angle MLN$ 、第8圖ハ後者ノ場合ヲ示スモノデ

$\angle MRG > \angle MRN$  ナルコトヲ要ス(理由ハ既述ス)。遮斷板ハ何レノ場合モMPヨリ大ナルヲ要ス。

第9圖カラ第12圖マデハ  $MN > MR$  ナル場合ヲ示スモノデ、Nガ鼻尖ニ限りナク接近シMNガ次第ニ大ナル時、MRヨリモ大ナルコトモアラム場合ヲ想像シタモノデアル。此ノ時  $MG > MR$  ナルヲ要ス。若シ  $MG < MR$  ナラバ勿論  $MG < MN$  トナリ兩眼視ハ有リ得ナイカラデアル。第9圖ハG點ガY線ヨリモ左側ニ在ル場合、第10圖ハG點ガY線トX線トノ間ニ在ル場合ヲ示スモノデ、此ノ兩者共  $\angle MRG > \angle MRN$  ナルコトヲ要ス。若シ  $\angle MRG < \angle MRN$  ナル場合ハMNハ自ラ右視線RGヲ遮斷スルコトニナリ遮斷板ノ大キサヲ吟味スル範圍外ニ屬スルカラデアル(此ノ事ハ既述シタ)。第11圖ハG點ガX線トZ線トノ間ニ在ル場合ヲ示スモノデ、此ノ時  $\angle MLG > \angle MLN$  ナルコトヲ要ス。何トナレバ  $\angle MLG < \angle MLN$  ナラバMNニ依ツテ左視線LGヲ遮斷スルコトニナリ右視線ヲ遮斷スル目的ニ反スルカラデアル(此ノ事モ既述シタ)。以上ノ第9圖カラ第11圖マデニ於テRGニ垂直ナル直線MPヲ描キ得ルガ、遮斷板ハ此ノMPヨリモ大ナルヲ要ス。第12圖ハG點ガZ線ヨリモ右側ニ在ル場合ヲ示スモノデ  $\angle MLG > \angle MLN$  ナルヲ要ス。

何トナレバ  $\angle MLG < \angle MLN$  ナラバMNハ左視線LGヲ自ラ遮斷スルコトニナリ右視線ヲ遮斷スル目的ニ反スルカラデアル。從ツテ此ノ場合右視線RGヲ遮斷スル方法ハ、 $\angle MRG$ ガ鈍角ナルタメRGニ垂直ナル直線ヲMヨリ眼前ニ於テ描キ得ナイカラ遮斷板ハMRヨリモ大ナルヲ要ス。

以上第1圖カラ第12圖ニ至ルマデノ總ベテノ場合ヲ通ジテ  $MG > MN$  ナルヲ要スルコトハ自明ノ理デアル。何トナレバ  $MG < MN$  ナラバG點ハ常ニ鼻梁ニ遮斷サレ兩眼視可能ノ有無ハ吟味考察スルニ及バナイ。更ニ追記シタイ事ハ遮斷板ハMGヨリモ大ナル場合ハ視線上何レノ一點ニ於テモ之レヲ遮斷シ得ルシ、又MRヨリモ

大ニシテ MG ヨリモ小ナル場合モ同様之レヲ遮斷シ得。前者ノ場合ハ遮斷應用範圍ガ廣イガ、後者ノ場合ハ狭イ譯デアアル。

以上ノ吟味考察ノ他ニ、MG=MN ノ場合ガアルガ検討法ハ同様デアアル。又遮斷板ガ MG, MR, MP ト夫々等シキ大キサノ場合ガアルガ特別ナ場合デアアルカラ省ク。

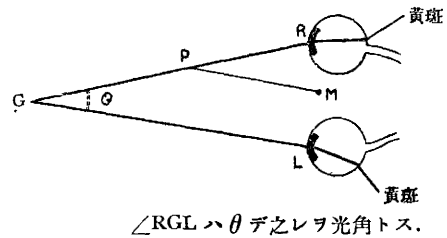
上述ノ如ク一眼ヲ遮斷スル方法ニ就イテ吟味考察シ、從來ノ記載ニスカル方法ヲ見ナイカラ敢テ一知見トシタガ、此ノ遮斷法ニモ此ノ他種々ナルモノガ有リ得ル筈デアアル。

翻ツテ余ノ遮斷法ヲ從來ノ知見ニ比較スルト、兩眼視デモ強ク側方ヲ見サセテ一眼ノ視線ガ鼻梁デ遮斷サレル時ニ生ズルト知ラレテキルガ、余ハ此ノ鼻梁ヲ遮斷板トシテ移動スル場合ヲ考ヘタモノニ近イ。又視線 RG ヲ遮斷スルニハ必ズシモ MP ヲ要セズシテ P 點ノミデ足リル譯デアリ、此ノ P 點ガ RG 線上ヲ移動シテ R ニ接近シタ場合ハ正ニ右眼ヲ被覆シタト同様ナル結果トナル。コレニ就イテ興味アルノハ、Fromaget ノ例デ讀書中ニ一眼前ニ於テ鉛筆ヲ以テ該眼ノ視野ヲ遮斷セルニ眼震ノ發來ヲ認メタト報ジテキルノハ、余ノ此ノ間ノ考ヘ方ノ正シキヲ裏書スルモノデハナカラウカ。

コ、デ余ガ論及シタコトハ從來多ク行ハレテキル一被覆法ト一限視線遮斷法トノ相違デアアル。即チ一眼ヲ閉眼或ハ被覆スルコトハ外界カラノ光線ヲ全ク防止(即チ廣義ニ於ケル視力曠置)スル事ニナルカラ開眼側網膜ニフミ映像スル。反之余ノ視線遮斷法ハ凝視點カラ發スル光線ハ何等處置ヲ行ハナイ開眼側網膜ニフミ映像スルハ勿論デアアルガ、遮斷側網膜ニハ映像シナイガ、遮斷板ノ反面即チ被檢者顔面側ノ遮斷板面カラ發スル光線ハ該側網膜ニ映像スルカラ兩眼網膜ニ結ブ映像ハ互ニ相異ナル。即チ前者ハ凝視點 G ヲ開眼側網膜ニ映像スルノミデアアルガ、後者ハ之レニ加ヘテ遮斷側網膜ニ凝視點 G ニ非ラザル點 P ヲ映像スル筈デアアル。故ニ兩眼視線 RG ト LG ガ凝視點 G ニテ交ハリ  $\angle RGL$  (之レヲ光角 optischer Winkel ト呼ブ) ガ形成サ

レル時ニ兩眼視ハ可能デアアルカラ眼震ヲ生ジナイガ、點 P ニ於テ RG ガ遮斷サレル時ニハ  $\angle RGL$  ハ形成サレナイコトニナリ兩眼視ハ不可能ノ爲メ眼震ヲ發來ス。故ニ潜伏性眼震ノ發來ハ凝視點ニ於テ光角ヲ形成スルヤ否ヤニ依ツテ定マルモノト考ヘタ方ガ解リ易カラウト思フ(第13圖参照)。

第 13 圖



$\angle RGL$  ハ  $\theta$  デ之レヲ光角トス。

次ニ本患者ノ眼震ニ就イテ一瞥スルニ先ヅ第2表ニ就イテ見ルト觀察眼ヲ右ニ採ルモ亦左ニ採ルモ共ニ眼震ノ急速態ノ方向ニ凝視方向ヲ持來スル時ニ發來スル眼震回数ハ凝視方向ヲ正面或ハ眼震ノ緩徐態ノ方向ニ在ラシメル場合ニ比シ最少イコトヲ知ル。コレハ耳性眼震ヤ其他ノ眼震ニ於テ多ク認メラレル急速態ノ方向ニ凝視方向ヲ持來スル時最モ眼震回数ガ多イトサレル場合ニ比スレバ異ナル所デアアル。

コ、デ興味アルノハ一被覆セル場合ト一限視線ヲ遮斷セル場合ト共ニ同様ニ眼震ノ發來アルニモ拘ラズ、凝視方向ヲ同一ノモノ(例、第2表觀察眼右、凝視方向正面ニ就キ見ル時ハ第5表觀察眼右、凝視方向正面ノ欄ヲ對比スルナリ)ニ就キ、夫々第2表及ビ第5表ニ於テ眼震回数ノ多寡ニ就キ右、正面、左ノ三ツノ場合ニ順序ヲ附シテ考フル時ハ第2表ノ第1位ハ第5表ノ第1位ヲ示ストハ限ラナイ。之レヨリ考フル時ハ此ノ患者ノ眼震發來ニ要スル條件ニ左眼ト右眼ノ兩者ノ間ニ異ナツタモノガ伏在スルコトナキヤヲ想像サセル。

更ニ第3表ト第6表トヲ比較スルニ、觀察眼ヲ右ニ採ルモ將又左ニ採ルモ第6表ハ第3表ヨリモ眼震回数ハ減少セルヲ知ル。此ノ事ハ凝視點 G ガ正中線 X 上ニ在リテ而モ遮斷板モ X 線

ト一致スル時、即チ余ノ所謂凝視點ニ於テ光角ガ形成セラル、場合ニハ眼震値ハ零デアラカラ、一眼視線遮斷ニ依ル第6表ノ値ハ一眼被覆ニ依ル第3表ノ値ト光角ガ形成サレル場合ニ眼震値ガ零トナル場合トノ間ニ存スルヲ思ハセルノデ興味ガ深い。

第8表ヲ見ルト「ピロカルピン」ヲ注射シタ10分後ニハ眼震回数ハ注射前ニ比シ増加セルヲ知ルト共ニ眼震ノ大キサモ注射前ニ比シ一定セズシテ振幅ノ混亂ヲ認メル。30分後ニナレバ眼震回数ハ10分後ノ夫レニ比シ減少セルヲ認メルガ注射前ニ比シテ増加セルヲ認メル。大キサニ就イテハ一定シ注射前ニ比シ大差ハナイ。60分後ニナレバ眼震回数モ注射前ト大差ガナイ。即チ本例ニ1%鹽酸ピロカルピン」0.5ccヲ皮下ニ注射セルニ眼震回数ヲ増加サセルコトヲ知ツタ。次ニ副交感神經末端ニ對シ「ピロカルピン」ト反對作用ヲ呈スル「アトロピン」ヲ注射セル場合ノ第10表ニ就イテ見ルニ眼震回数モ大キサモ注射前ニ比シテ明ラカナ變化ハ認メラレナイ。之レハ余ガ用ヒタ「アトロピン」ノ量ガ少ナカツタ結果カト思ハレル。

扱テ潜伏性眼震ノ原因ニ關シテハ今日猶明ラカニサレテキナイ。今次ニ簡單ニ諸説ヲ紹介セン。

- 1) Faucon ハ外直筋作用不全説
- 2) Fromaget ハ瞥見中樞興奮ニハ兩眼網膜刺戟ヲ要スルガ、一眼ノ興奮ガ遮斷サレルト合像意向ガ失ハレル爲メ眼震ヲ發來サセルト考ヘタ。
- 3) Hairi ハ一眼ノ瞥見中樞ノ興奮又ハ減弱ハ皮質中樞機能ニ依ツテ眼球變位ヲ惹起スルモノト考ヘタ。
- 4) 中島氏ハ兩眼視ノ場合ハ輻輳及ビ合像ノ兩作用ノ均衡ニ依ツテ眼震ノ發來ハナイガ、一視線ヲ失フ時ハ合像作用モ消失シ、此ノ兩作用

ノ均衡破綻ニ依ツテ眼震ガ發來スルト考ヘタ。

5) 立本氏ハ隨意性眼震ノ前梯トシタ。

今一ツコ、デ問題ニナル事ハ本例ニ於テ弱視ヲ有シ且ツ梅毒反應陽性ヲ示スコトデアル。強度ノ先天性或ハ後天性弱視者ニ眼震ヲ見ルコトハ周知デアル。又 Jgersheimer ハ視力ニ關係ナク先天性梅毒兒ニ眼震ノアルノヲ觀察シタガ、此ノ時ニ保有シタ弱視ノミニ依ツテ發來スル眼震ハナク、小腦部或ハ内耳ノ梅毒性疾患ガ關與シタト考ヘテキル。翻ツテ本例ニ於テハ小腦或ハ内耳ニ基因スルガ如キ症狀ハ全く證明サレナイ。遺傳性眼震ハ視力ト關係ガクナ家族的ニ檢討スレバ判明スルコトガ多ク、コ、デ興味アルコトハ、弱視者ニ見ラレル眼震例中ニ色素沈着減少ヲ認メルコトハ稀ナラズトサレテキルガ、本例ハ反之色素沈着過剩トモ稱スベキ夏日斑ノ存シタコトデアル。問診ニ依レバ、3年前ニ左上眼瞼ノ手術ヲ受ケテ以來、異常眼球運動ガ現ハレタト曰フモ、之レハ當時カラ眼ニ注意ヲ向ケル様ニナツタ爲メニ氣付クニ至ツタモノト推察サレル。何トナレバ潜伏性眼震ハ醫師ニヨリ診察時發見サレルコトガアルコト、又一眼ノ視力ヲ奪ツテ作業ヲナス場合ハ極メテ稀レデアル上ニ、此ノ際對象物ノ見掛ケノ運動ノ如キ自覺症狀ヲ缺除スルカラ他人ニ依ツテ指摘サレネバ發見サレ難イ等ノ制限ガ加ヘラレルコトヲ考ヘタカラデアル。

以上ヲ綜合シテ按ズルニ、本例ニ見ル眼震ハ弱視又ハ遺傳ニ因ルモノトスレバ潜伏性デアル必要ガナク又 Jgersheimer ノ例トスレバ小腦部ヤ内耳疾患ニヨル症狀ハ證明サレナイ。唯本例ニ於テ有スル梅毒ハ先天性ト推定サレル事デアルガ、孰レニシテモ本例ハ先天性或ハ生後間モナイ潜伏性眼球震盪ト考ヘテ差支ヘナク、梅毒ハ偶々之レニ先天性ニ合併シタモノカト推定サレル。

## 5. 結 論

- 1) 余ハ兩側慢性上顎洞炎患者ニ於テ偶々潜伏性眼球震盪ヲ有スル事ヲ認メ、之レニ就イテ

凝視線ヲ右、正面、左ニ固定シテ其ノ量及ビ大キサヲ検討シタ。

2) 觀察眼ヲ右及ビ左ニ採リ此ノ兩者ノ比較ヲナスニ、左眼被覆法時モ左眼視線遮斷法時モ共ニ觀察眼ヲ右ニ採レル場合ガ左ニ採レル場合ヨリモ眼震回数ハ常ニ優ツテキタ。

3) 「ピロカルピン注射ニ依ツテ眼震ノ顯著ニ發來スルコトヲ知ツタガ、アトロピン注射ニ依ツテハ見ル結果ヲ得ナカツタ。

4) 本例ニ於テ凝視點ヲ正中線上ニ置キ、一眼ヲ被覆スル時ニ眼震値ハ最大デアリ、一眼凝視線ノ任意ノ一點デ遮斷板ニ依リ該凝視線ヲ遮斷スル場合ノ眼震値ハ之レニ次ギ、兩眼凝視線ヲ凝視點ニ於テ交ハラシムル場合ノ眼震値ハ零デアル。

5) 潜伏性眼震ノ發來ハ必ズシモ一眼被覆法ノミニ依存スル譯ノモノデハナク一眼ノ凝視線ヲ任意ノ一點ニ於テ遮斷スレバ足リル。之レニ遮斷板ヲ應用シ、凝視點ノ位置ガ種々移動スル

場合ニ於テ鼻梁ノ高低トノ關係ヲ、兩眼ノ中央點ト一眼ノ距離ハ一定デアルノヲ基本トシテ種々吟味ヲ試ミ且ツ是等ノ各々ノ場合ニ於ケル遮斷板ノ大キサノ最小必要限ヲ圖ヲ以テ説明シタ。

6) 余ハ潜伏性眼震ハ凝視セントスルー點ニ於テ光角ガ形成サレナイ場合ニ發來スルトシタ方ガ解シ易カラウト述べ度イ。

7) 本例ハ成人後ニ於テ眼瞼手術ヲ受ケタル時カラ異狀眼球運動ガ發現シタト稱スルモ、斜視ヲ認メナイコト、異狀眼球運動ハ潜伏性ナルコト及ビ小腦ヤ内耳ノ疾患ヲ認メザルコト等ヨリシテ梅毒及ビ弱視ニ起因スルト考フルヨリモ、先天性又ハ生後間モナク生ジタル潜伏性眼球震盪ト考ヘテ差支ヘナカラムトシタ。

欄筆スルニ方リ御校閱ヲ賜ハツタ松田教授並ビニ御教示下サツタ種村助教授ニ深謝スルト共ニ、眼科領域所見ノ項ハ本學眼科教室ヲ煩ハシタノデ茲ニオ禮ヲ申上ゲル。

## 文 獻

1) 田邊信晴, 潜伏性眼球震盪症ノ一例. 中央眼報, 32卷, 7號, 737. 2) 林脩, 潜伏性眼球震盪. 中央眼報, 31卷, 2號, 205. 3) 淺田健治, 毛髮及ビ皮膚色素僅少者ニ見タル潜伏性眼球震盪症. 實驗眼誌, 209號, 852. 4) 堀内俊彦, 弱視性眼球震盪症ハ視力ノ恢復ニヨリ消失スルモノナルカ. 實驗眼誌, 149號, 786. 5) 横田義雄, 高度遠視ト潜伏性眼球震盪症ノ合併セ

ル一例. 眼科臨床, 31卷, 12號, 1236. 6) 工藤愛子, 潜伏性眼球震盪症. 眼科臨床, 31卷, 2號, 219. 7) 簡貞敏, 潜伏性眼球震盪症ノ一例. 朝鮮醫會誌, 23卷, 4號, 621. 8) 立木豊, 偶發性眼球震盪ト其ノ検査法. 診斷治療, 20卷, 5號, 710. 9) 山本尚武, 異狀眼球運動ノ二症例. 日眼會誌, 39卷, 11號, 2160.